



♪たとえ君が傷ついて くじけそうになったときは
かならず僕がそばにいて 支えてあげるよその肩を

(「Break」作詞・作曲杉本竜一 二〇〇六)

冒頭の合唱。六年生の本気の歌声はここまで響くものなのか、と感動しました。半分思春期に入りかけた六年生の子どもたちですが、本校六年生のその素直さに改めて驚き、素直でいられる集団であることが嬉しくなりました。十一日三校時の六年生人権集会でのことです。

六年生はハンセン病についての正しい知識を学び、ハンセン病への間違った対応と差別の歴史を学び、元患者への差別の苦しみを学びました。学んだことを竹内凜さんが代表で発表しました。もしかしたら小学生には難しいのではないかという内容も含めた大変詳しい園長さんのお話、また、歴史資料館で見聞きしたことも含めて、彼女が自分の正しい知識としたことがよくわかりました。竹内さんの発表は、学んだ内容だけを述べるのではなく、その時の自分の気持ちや経験も重ねた話だったからです。ハンセン病学習を通して、六年生は正しい知識を得ることが出来ました。同時に正しい知識を得ることそのものの大切さも学びました。正しい知識は関心がなければ得られないものです。無知・無関心が差別を生むことを、ハンセン病の差別の歴史・現実から学んでいます。そうしたハンセン病についての学びを生かして、自分たちの学級はどうだろうか、自分はどうだろうかという振り返りを行っています。クラスのこと、友達のことを自分知っているのか、知ろうとしているのか、無関心ではなかったか、知らないのに、無関心なのに決めつけていなかったか、改めて振り返っています。

そうした振り返りの学習をふまえた各学級からの発表の中には、たくさんのキーワードがありました。「正義」「関心」「知ること」「差別された人の気持ち」「自分が感じたことのないぐらいの辛さ」「向き合う」・・・たくさんの大事な言葉が、子どもたちの口から出てきました。自分の経験を語る子がいました。なかなか周りの人には今まで言えなかったであろう悩みを打ち明ける子、自分の辛い経験とそれを乗り越えてきたことを話す子もいました。何のためにこんなに言いにくいことを言うのでしょうか。それは、友達ともっと深く繋がり合いたいからです。発表した子どもたちのそんな、

思いを、聞いている子どもたちにはしっかりと受け止めて欲しいと思いました。「受け止める」とは、肯定的・共感的に理解すること、理解しようとするのだと思います。受け止めたであろう子どもたちが、次々と手を上げてお返しをしていました。中には受け止めた上で自分を振り返り、過去の自分の間違った言動を一生懸命に語り、謝ろうとする子もいました。

周りの子どもたちは、次々とお返しを発表する子を見ながら様々な表情をしています。手を上げる勇氣はないけれども言葉をかけたい気持ちにあふれたような表情、胸が一杯でなんて言っていないかわからない表情、受け止め切れないけど、一生懸命受け止めようとしている表情、どの表情も尊い。そんな表情を見ながら、迫り来る「校長先生の話」の時に何を伝えるか、ずっと考えていました。

私が一番伝えたかったのは、私自身が集会での六年生の姿に学ぶことができたということです。学習を通して周りとながる良さを感じました。冷房の効かないなんとなく蒸し暑い図工室でしたが、雰囲気がとても温かくて居心地の良い空間でした。これだったら六年生にはエアコンいらないと思うほど。(冗談です)そして、関心を持って知ろうとすることは、私たち職員も心がけていることだと伝えました。学校の日常はたくさんのことがあります。正しいことも間違ったことも起こります。間違った発言や行動はもちろんよくないし、二度として欲しくありません。だから、指導します。でも、間違った言動や行動の背景に何があるのかを知ろうとしています。その子に関心をもって知ろうとします。それがとても大事なことで、六年生の発表を聞きながら改めて感じました。

私はこのとき「じわる」と言いました。最近はやりの言葉です。「感動がじわじわ伝わる」という意味で使いました。でも違ったみたいですよ。「あとからおかしさがこみ上げて笑ってしまふ」という意味だそうです。後の祭りです。でもいいんです。笑顔を返したのが事実ですから。



七月十日 日本曜日 雨
きょうは、六年生のみんなを
行きた。六年生のみんなの姿に
思わず「じわる」時間だ。うれし
かったよ。
次の時間にいじわるな泳ぎ
をした。泳ぎを泳ぎました。
こころを泳ぎました。
こころを泳ぎました。
こころを泳ぎました。
こころを泳ぎました。
こころを泳ぎました。
こころを泳ぎました。
こころを泳ぎました。